

## つなごうとする意志 —2013年上半期の舞台を見て

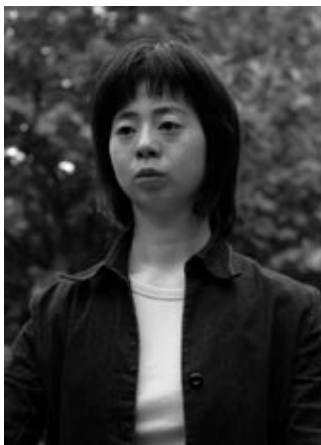
松岡和子  
Kazuko Matsuoka

ができた。「作品」という線引きや、作品に対する「評価」という線引き、また、「ダンスを見る目的」という線引きをどのように解いて行くことができるか？それは自分が線引きしている物事をどこまで自覚できるか？という戦いでもあったと思う。そういった線引きが自分を閉じ込めている、その息苦しさをできるだけはつきりと感じられるようなシステムをわざと作ってみる実験といってもいい。その取り組みは本当に苦しい作業でもあったけれど、現実に向き合ってる感覚が濃くなって行くということが希望だった。そして、それが出演者全員にとって、また立ち会ってくださった方々にとって、線引きを解いて生きて行けるような力になっていけたら、という切実な願いもあった。

### 根を張って来たことの意味

私自身のアーティスト活動にとって、この三年間にこれだけの大きな転換期を迎えるということは予想していなかった。継続した支援を受けている期間は、私自身の根の張り方に大きな力を与え、震災というショックによって今までの問いに対して大きな示唆を与えられた。そして、新たなアウトプットの可能性を手にすることができた。今後、その取り組みが自分でも予期しない様々な目的以外の出会いや出来事を通して様々な枝葉を伸ばし、多様な活動へと押し上げ続けるだろう。今、日本は様々な危機的状況を迎えつつある。その中で生きるにあたって、私自身、押しつぶされないだけの根をはるることができた。そのことが、この状況の中でアーティストとして役割を果たして行く上で非常に大きいということは言うまでもない。

\*2010-2012年度セゾン・フェロー



手塚夏子(てつか・なつこ)

ダンサー/振付家。96年より、マイムからダンスへと以降しつつ、既成のテクニックではないスタイルの試行錯誤をテーマに活動を続ける。01年より自身の体を観察する『私的解剖実験シリーズ』始動。02年、私的な実験の小さな成果が『私的解剖実験-2』に結晶。同作品はトヨタコレオグラフィアワードファイナリストとして同年7月に上演。その後、ニューヨーク、シドニー、ベルリン、ポーランド、ジャカルタなど各地での交流や上演を行う。また、独自の手法でコンテンポラリーダンスに取り組むアーティストと対話し、彼らの手法について思考し体で試行する「道場破り」や、体をテーマに建築家や鍼灸医など様々な職種の方とのトークをし、観客を巻き込んでの実験を試みる「からだカフェ」など、自主企画も多数。10年より、国の枠組みを疑って民俗芸能を観察する試みであるAsia Interactive Researchを始動。

<http://natsukote-info.blogspot.jp/>

当財団評議員として、また翻訳者としてのお立場から、松岡氏に演劇界の動向について寄稿していただいた。  
(編集部)

2013年も半ばを過ぎました。

3・11から二年経ち、参議院選挙で自民党が圧勝したこの年は、演劇の分野では将来どのように記憶されるのでしょうか。

新装なった歌舞伎座開場の年？

寺山修司没後30年？

今年の私の劇場通いは立川志の輔の落語で幕を開け、作り手側の一員としての仕事は、演出家・蜷川幸雄率いる彩の国さいたま芸術劇場のシェイクスピア・シリーズ第27弾『ヘンリー四世』(二部作を2012年の晩秋に訳了)の稽古から始まりました。

新歌舞伎座の柿落しと寺山修司にまつわる諸イベントという大きな二点にも関連することですが、舞台をはさむ表と裏から見てきたこの半年あまりを振り返ると、私の頭に浮かんでくる一連の言葉群があります。

つなぐ、引き継ぐ、手渡す、伝える、残す、バトンタッチ、継承、などなど。

歌舞伎座の場合は、昨年秋に中村勘三郎が、今年に入って市川團十郎が亡くなり、その喪失を背負った開場であるだけに、日本を代表するこの伝統芸能の根幹を「継承」することの重要性が、歌舞伎界の内外で論じられ大きな課題となっています。

けれど、この「引き継ぐ」とか「継承する」という姿勢が今年には現代演劇の分野でも目につくのです。そのひとつのかたちかたが再演。以下に挙げるのがその例ですが、これらは私が見たものだけです、もっと他にもあるかもしれません。

### 1) 作・演出をしてきた作家による自作の再演。

小野寺修二演出、カンパニーデラシネラ『異邦人』(アルベール・カミュ作の同名の小説をもとに2010年に初演された)

松尾スズキ作・演出『マシーン日記』(松尾の主宰劇団、大人計画による初演は1996年。その後再演・再々演三回。今回は東京芸術劇場の制作、キャスト一新)

前田司郎作・演出『いやむしろわすれて草』(前田の主宰劇団、五反田団による初演は2004年、再演は2007年。今回の主催は青山円形劇場とネルケプランニング。不治の病に冒された主役を満島ひかりが好演)

ケラリーノ・サンドロヴィッチ作・演出『わが闇』(初演は2007年、KERAが主宰する劇団ナイロン100°Cの創立20周年記念公演。)

この戯曲の強さとナイロン100°Cの俳優たちの共演・競演力が確かめられた)

以上のどの舞台も初演は3・11以前ですが、それをまたいでも、一個の作品としての有効性は衰えていないことが証明されたと思います。

## 2) 先行世代の作家の作品を若手の演出家や、当の作家とは演劇の質を異にする演出家が演出する。

寺山修司作・演出『レミング』(寺山が主宰した演劇実験室◎天井桟敷による初演は1979年。今回の演出は維新派で作・演出を手がける松本雄吉、上演台本は松本と劇団少年王者館の天野天街)

つかこうへい作『ストリッパー物語』(つか自身の演出による初演は1975年。今回の構成・演出は三浦大輔。1975年生まれの三浦は劇作家・演出家として劇団ポツドルを主宰し、ハイパーリアルな演劇を創り出している)

この『ストリッパー物語』のパンフレットに寄稿した演劇評論家・扇田昭彦によれば、これは「東京芸術劇場が始めた新しいシリーズ企画Roots(ルーツ)の第一弾」であり、「現在の日本の現代演劇の重要なルーツである、1960年代から70年代にかけての小劇場運動の演劇、いわゆる「アンガラ演劇」の名作を、新しい世代の演出家の手で上演し、その魅力を再発見しようという企画」です。

新国立劇場で上演された別役実作の『象』(初演は1962年。今回の『象』は2010年に新国立で上演された舞台の再演)もこの系譜に入るでしょう。演出の深津篤史(しげふみ)は関西で活躍する劇団桃園会を主宰する劇作家・演出家で1967年生まれ。広島に投下された原爆によってヒバクシャになった男が、自分の背中のケロイドを見せ物にしてきたが、時が経つにつれて、周囲は男にそれをさせまいとする。いま見ると、広島は福島に重なり、舞台全面を埋め尽くす古着の山は大震災の被災地の瓦礫に重なってくるのでした。

小劇場演劇運動の始まった60年代後半以来、トップランナーであり続ける巨人ふたり、唐十郎と蜷川幸雄が組んだ『盲導犬』。1973年に唐が蜷川のために書き下ろしたこの戯曲を、蜷川は89年の再演を経て、40年ぶりに上演しました。宮沢りえを主役に得て、謎が絡み合う劇世界が鮮烈に蘇りました。

唐は昨年5月、転倒により後頭部を強打した。毎日のリハビリのおかげで諸機能の回復のきざしはあるものの、執筆に戻れるのはまだ先のようなとか。それだけに蜷川は唐戯曲という現代日本演劇の宝を、若い後継世代に継承させたいと強く思っているようです。

ここで、ちょっと毛色が変わった劇団に触れさせてください。その名は「植吉劇場」。この5月に第3回公演『松ぼっくりⅢ』(作・古屋治男、演出・大岩美智子)を下北沢の「劇」小劇場で上演しました。チラシにある惹句は「植木屋が演る、植木屋の芝居」「あの、植木屋たちが帰ってきた。植木屋が役者なのか、役者が植木屋なのか」。そのチラシの裏面の裾には「庭木の剪定・消毒等、お庭のご相談承ります。この舞台のメンバーがお宅に伺います。見積もり無料!」とある。この集団の主宰者であり植木屋の親方でもある植吉こと高橋広吉(ひろ

よし)はれっきとした植木屋であり、役者です。もう何年も前から我が家の庭の手入れを頼んでおり、それよりもっと前から私は彼の芝居を見てきました。今回の舞台は、先代施主の日本庭園を残すか否かが主題でした。

六年前の劇団旗揚げ作『松ぼっくり!!』以来の共演者、三田村周三と高橋は共に故金杉忠男(1940~1997)主宰の中村座の中心メンバーでした。下町の原っぱを背景とする郷愁に満ちた金杉劇を演じる中村座は「アングラの化石」と呼ばれていました。その中でガキっぽくも男っぽい面々が舞台の上手下手に立てられた「突撃板」に文字通り体当たり。植吉劇場はその心意気を引き継いでいます。

三田村は「三田村組」という集団の主宰者でもあり、一貫して若い劇作家に新作を委嘱してきました。現在幅広く活躍中の蓬莱竜太(モダンスイマーズ、1976年生まれ)や田村孝裕(ONEOR8、1976年生まれ)の作品に私が初めて触れたのは、三田村組の舞台を通してでした。

その蓬莱の今年の最大の仕事は『木の上の軍隊』(こまつ座・ホリプロ制作)だと思います。2010年4月に亡くなった井上ひさしが、沖縄のことを書きたい、書かねばならないと思いついて、ついに果たせなかった作品。井上が残したタイトルと原案のメモだけを手がかりに、そしてやはり井上が残した膨大な資料をもとに、蓬莱は井上の遺志を引き継いでこの戯曲を書き上げ、長らく井上作品を手がけてきた栗山民也の演出で上演されたのでした。日本の敗戦を知らぬまま、二年にわたり伊江島のカジュマルの木の上で暮らした二人の日本兵の物語。沖縄の置かれた状況は敗戦時から70年近く経ついまも根本的には変わらないと思われ知らされたものです。

そもそもこまつ座は井上ひさしの遺作を引き継ぎ、いまに生かすことを目標にしていると言っているでしょう。『木の上の軍隊』はそのコンセプトの結実です。

考えてみれば、演劇において「つなぐ、引き継ぐ、手渡す、伝える、残す、バトンタッチ、継承」ということをする筆頭は演出家です。古典を含む過去の作品を「いま」につなぐ、戯曲をスタッフキャストに手渡す、舞台と客席をつなぐ……。

その意味で、若い優れた演出家に出会えた半年でもありました。哲学者ルートヴィヒ・ヴィトゲンシュタインを主人公に作・演出を手がけた谷賢一(DULL-COLORED POP主宰)、カフカの『審判』とその家族関係を踏まえた苦い家庭劇『生憎』(大森寿美男作、植吉が狷介な足の悪い父親役で出演)を鮮やかに演出した扇田拓也、ハロルド・ピンターの『帰郷 -The Homecoming-』を翻訳し、演出した小川絵梨子、演劇集団円の『ワーニャ伯父さん』を演出した内藤裕子などなど。

古典と言えばシェイクスピアですが、この上半期だけでも刺激的な演出のシェイクスピア劇を何本も見ることができました。

富士見市民文化会館キラリ☆ふじみの『ハムレット』(演出・多田淳之介)。乱雑に置かれた無数のパイプ椅子、客は好きな方向を向いて坐り、四方の壁に投影される映像を眺めるというオープニングにしても、観客が何回か別の場所に移動させられるという進行の仕方にしても、自由な発想の演出が痛快。

若い劇団カクシンハンの『リア』(演出・木村龍之介)、新宿の「雑遊」の狭い空間が爆発しそうなアナーキーなエネルギー、三十代の俳優、河内大和がエネルギーに老王を演じたのが新鮮でした。

子供のためのシェイクスピアカンパニーの今夏の上演作は『ジュリアス・シーザー』(脚本・演出・出演・山崎清介)。彼らにとって初のローマ史劇は、9人の俳優と人形により休憩なしで演じられ、息もつかせぬ緊迫感を生み出しました。

滅多に上演されず、知名度もいまひとつの喜劇『ヴェローナの二紳士』ですが、若い劇団ハイリンド(演出・西沢栄治)はこれを生き生きと弾むように舞台化し、観客を大いに楽しませていました。

翻訳者としては若い演出家や俳優がシェイクスピアに取り組み、またやりたいと言ってくれるのは何よりの励みです。

さて、これからの話なので書き忘れるところでしたが、1988年に開館した伊丹市のアイホールはこの秋「現代演劇レトロスペクティブ」と銘打つ企画を開催します。同ホールのディレクター岩崎正裕はその企画書で「60年代から90年代にかけて蓄積された演劇作品群は未来に向けた知的財産」と言っています。5回目となる2013年一つ目の作品は桃園会の第45回公演として上演される唐十郎作の『少女仮面』。演出は深津篤史。期せずして東京芸術劇場のRootsと肩を並べることになりそうです。

こうして挙げたような現象をから窺えるのは、過去を振り返り、現在の状況を確認して、それから先へ進むという姿勢です。3・11を体験したこの国で演劇に携わる人々はいま、ある者は自覚的意識的に、またある者は無意識のうちに、このような姿勢を取っているのではないのでしょうか。

ハムレットは言っています、「創り主は我々(人間)にこんなにも大きな思考力を授けられ過去と未来に目を向けるようにされた。その能力と神のごとき理性を持ち腐れにしていはいはずがない」(四幕四場)

同じ古典でも、戯曲には詩歌や物語と大きく異なる特質があります。それは、戯曲は「いま」演じられれば、ギリシャ悲劇であれシェイクスピア劇であれ、「現代劇」になるということです。次へとなつて「人」

がいれば、決して滅びません。逆に、そういう「人」が居なくなれば、たちまち滅びてしまう。

「つなぐこと」と「人」、それに尽きます。この夏南相馬市で見た相馬野馬追の残像とこの半年で見えてきた印象深い舞台を重ねるにつけ、強くそう思います。

付記: 本稿を書き終えたあと、8月の初めに渡辺えり作・演出・出演の『赤い壁の家』を見ました。イタリアのポンペイと日本の東北地方を結びつけ、甚大な自然災害によって断ち切られた人間の営みをつなぎ直そうとする意志と祈りに満ちた作品でした。60年代70年代演劇の華とも言うべき緑魔子、若松武史、田根楽子らを中心に据えた配役といい、本稿で取り上げた様々ななかたちの「継承」のひとつの極点を見る思いがしました。

(敬称略)



松岡和子(まつおか かずこ)

翻訳家・演劇評論家/セゾン文化財団評議員。1942年旧満州新京(長春)生まれ。東京女子大学英米文学科卒業。東京大学大学院修士課程修了。専攻は17世紀イギリス演劇。現代演劇協会(付属劇団雲)芸芸部研究生、『罪と罰』(演出・福田恒存)『黄金の国』(演出・芥川比呂志)に演出助手として参加。主な著書は『ドラマ仕掛けの空間』(創樹社)、『すべての季節のシェイクスピア』(筑摩書房)、『シェイクスピア「もの」語り』(新潮社)、『深読みシェイクスピア』(新潮社)。訳書は『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』、『クラウド9』など。現在、シェイクスピア戯曲の全訳に取り組んでおり、既刊は『ハムレット』『ロミオとジュリエット』『マクベス』『リア王』など。1995年第2回湯浅芳子賞受賞(海外戯曲翻訳部門)。日本シェイクスピア協会会員、国際演劇評論家協会会員。

<http://homepage1.nifty.com/shakespeare/>

## viewpoint セゾン文化財団ニュースレター第64号

2013年8月31日発行

編集人: 片山正夫

発行所: 公益財団法人セゾン文化財団

〒104-0061 東京都中央区銀座1-16-1 東貨ビル8F

Tel: 03-3535-5566 Fax: 03-3535-5565

URL: <http://www.saison.or.jp>

E-mail: [foundation@saison.or.jp](mailto:foundation@saison.or.jp)

●次回発行予定: 2013年11月末 ●本ニュースレターをご希望の方は送料(90円)実費負担にてセゾン文化財団までお申し込みください。